

「女性視点の防災ブック」編集・検討委員会
(第1回)
議 事 録

平成29年5月17日(水)
第一本庁舎7階 大会議室

○事務局 ただいまから、第1回「女性視点の防災ブック編集・検討委員会」を開催いたします。私は、総務局総合防災部長の梅村でございます。委員長の選任までの進行を務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

当委員会は、女性視点の防災ブックの作成に向けて、コンセプトや掲載内容について議論を行うために開催をするものでございます。なお、会議の公開につきまして、この第1回委員会は公開とさせていただきますが、第2回以降は知的財産保護の観点から非公開とし、議事概要のみホームページで公開をさせていただきます。

それでは、次第に沿って進めさせていただきます。まず最初に、会議の開催にあたりまして、小池都知事よりご挨拶をいただきます。知事、よろしくお願いいたします。

○小池知事 皆様、こんにちは。都知事の小池百合子でございます。

本日はお忙しいところ、皆様、お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。それぞれ防災の観点から、スペシャリストの皆様にお声をかけさせていただき、今日、第一回の編集・検討委員会になったわけでございます。

先日、私、熊本地震後の被災地を訪ねさせていただきました。また、東日本大震災の被災地も何度か訪問させていただいております。さらに申し上げるならば、私は、阪神大震災の中におりまして、様々な想定外のことがいくらかでも同時に起こるのだということを体感した一人でございます。

そういった意味で、これら様々な災害における被災者、もしくはいろんな影響を受ける方々がまず、どのようにして防いでいくのか。それから、いざという時のために何を備えればいいのかなど、例えば、防災ガールの方もいらっしゃいますし、これを女性の視点から探っていこうというのが、何よりも今日の明確な主旨でございます。

地域の絆を強めるというのも実は防災につながります。それから、私がかねてより申し上げていますが、電柱をなくしていきましようというのは、単に街の景色を良くしましようということではございません。実際に、阪神大震災の際も、東日本も、熊本も、電柱が倒れることによって、肝心な所に救援の車が到達できないのです。

そういったところから、防災というのをもっともって多面的に捉えながら、その時どうするかということを皆様と共に考え、そしてこちら黄色い「東京防災」という本がございますが、ここをさらに女性の目線から作ろうというものでございます。

今日は、「an・an」の中島さんもお越しいただきましたけども、「an・an」でもこういう冊子を出していただいております。

女性の観点という切り口で、「東京防災」の姉妹版という形になればよろしいのかなというのが、私の考え方でございます。

それから、女性の観点で言えば、避難所になる体育館などがございすけれども、最近の間仕切りをどうするかということで、いろんな工夫もされるようになりましたが、やはりプライバシーの確保というのができにくい。そのために、ペットがいるから、赤ちゃんが泣くからといって車中泊になられて、そしてエコノミー症候群に陥るといった話は普通に聞

きます。

それから、私が力を入れましたのが液体ミルクでございます。水が止まる、ガスが止まる、電気が止まるといったときに、乳飲み児を抱えておられるお母さん方はどんなに苦労されるかということで、こういう液体ミルクは日本では作ってもいない、売ってもいない。これをなんとか国内で手に入れられる体制にした上で、防災のための予備グッズとして、東京都としても備えておくのはいかがかと思っております。それによって製造の意欲へもつながるのではないかと、このような考え方でございます。

今日はわざわざお越しいただいた委員の皆様方にこの後プレゼンテーションをしていただくこととなるわけでございますけれども、どうぞ皆さん、いつ何が起こるか分からないということでスピード感を持って、そして中身を濃く、そしてさらには分かりやすく、はい、自分でやりましょうというように、女性のみならず、男性にもそういうことを理解していただけるような、そんな方向性を持った委員会にしていきたいと思っております。

どうぞ、よろしくお願いいたします。

○事務局 ありがとうございます。次に、委員の方々をご紹介させていただきます。

聖路加国際大学大学院看護学研究科准教授、五十嵐ゆかり様でございます。

公益財団法人市民防災研究所理事、池上三喜子様でございます。

株式会社危機管理教育研究所代表、国崎信江様でございます。

一般社団法人防災ガール代表理事、田中美咲様でございます。

特定非営利活動法人ママプラグ代表、富川万美様でございます。

株式会社マガジンハウス an・an 編集部、中島千恵様でございます。

続きまして、本委員会の委員長への選任に移ります。委員長につきましては、皆様には事前にご相談させていただいていました通り、東京都防災会議委員などを歴任され、女性の視点を生かした減災対策にも携わりご活躍をされている、池上委員にぜひお願いしたいと思っておりますが、よろしいでしょうか。

（「異議なし」の声あり）

ありがとうございます。それでは委員長は池上委員にお願いしたいと存じます。これからの進行につきましては池上委員長にお願いいたします。よろしくお願いいたします。

○池上委員長 それでは、委員長を仰せつかりました。よろしくお願いいたします。

知事からお話がありましたように、女性ならではのノウハウや意義を生かして多くの人に活用していただける本を作成するために委員の皆様と議論を進めていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

各委員の皆様への防災への関わり方や、その中で感じたこと、防災ブックに望むことなどについてプレゼンテーションをお願いしたいと思います。本日の終了時間が 14 時 30 分となっております。ぜひ時間厳守で、プレゼン後の都知事とのお話の時間を長く取りたいと思います。ご協力よろしくお願いいたします。

それでは、さっそく五十嵐委員よろしくお願いいたします。

○五十嵐委員 よろしく願いいたします。聖路加国際大学の五十嵐ゆかりと申します。

私、自助と共助の芽生えの支援ということでお話をさせていただきます。

（【資料 4】「委員プレゼンテーション資料 五十嵐ゆかり委員」 p2 参照）まず、自己紹介からなのですが、私は岩手県花巻市出身の助産師です。助産師としては、新宿区の病院で勤務しておりました。現在は、聖路加国際大学という看護の大学で産科領域の科目を担当しております。

（【資料 4】「委員プレゼンテーション資料 五十嵐ゆかり委員」 p3~4 参照）東日本大震災では、陸前高田市で女性のための支援活動をさせていただきました。支援活動前の調査においては、清潔維持の困難、女性特有の健康問題に対する情報提供の少なさ、ニーズに合わせた物資の提供が不足していること。それから、治安が変化していることが課題として挙がりました。

（【資料 4】「委員プレゼンテーション資料 五十嵐ゆかり委員」 p5 参照）この結果を受けまして、これらの問題が解決できるように、女性に必要な衛生用品を入れたバッグを配布させていただきました。これらは年代別に内容を少し変え、さらに女性の健康に対する情報を記載したパンフレットも作成させていただきました。このセットでは、特に外陰部の清潔を保つためのビデが非常に喜ばれました。

（【資料 4】「委員プレゼンテーション資料 五十嵐ゆかり委員」 p6~7 参照）これが支援活動の様子になります。このセットは、6,669 セット配布させていただきました。この写真は、「an・an」の防災ブックに掲載させていただいた内容になります。セットの名前ですが、このセットは女性に必要な物が入っているので、女の「なっても袋」という方言を使った親しみやすい名前にさせていただきました。ちなみに、「なっても」というのは、花巻では「なんでも」という意味になります。

（【資料 4】「委員プレゼンテーション資料 五十嵐ゆかり委員」 p8~9 参照）このセットを配布しながら、支援活動として女性の健康に関する相談を受けていきましたけれども、ここにあるように避難所でも、仮設住宅でも、不眠が一番多い相談事でした。

また、私たちの活動に対する声としては、「なっても袋」の内容のそれぞれが良かったというお声や、個別相談で話をするのが良かったことが良かったというようにお声を頂きました。

（【資料 4】「委員プレゼンテーション資料 五十嵐ゆかり委員」 p10 参照）これらの活動を基に、さらに行ってきたこととしては、幅広い世代の子供たちから老年期の女性まで、それぞれの声に対して、ニーズに合わせてパンフレットを作成し、被災地で配布させていただきました。

（【資料 4】「委員プレゼンテーション資料 五十嵐ゆかり委員」 p11~12 参照）また、啓蒙活動として岩手県の会社とコラボレーションをしまして、防災意識を高めるための商品を開発したり、これは手拭いですが、こういった物を作らせていただいたり、自治体と女性の視点を大切にしたい避難所運営のパンフレットを作成したり、ということをしてい

ただきました。

支援活動を通じ、被災者の皆さんに教えていただいたことを踏まえて、今回の女性視点の防災ブックには、「自助」と「共助」について強調していけたらと思います。

【資料4】「委員プレゼンテーション資料 五十嵐ゆかり委員」p13～17 参照) まず、「自助」ですけれども、調査の結果では、災害時に女性が必要な物が多いということが分かります。女性特有の問題として、必要とを感じるものが多いですとか、ライフサイクルによって必要なものが異なる。また、日々の生活では役割が多い、などが挙げられます。

これらに対して女性が必要な物を選択して提示したり、日々の生活で使用している物をさりげなく防災にも使用できることを提案していくことを盛り込んだり、また、女性は体調の変化によって月経周期の乱れや膀胱炎などの健康障害の影響が出やすいので、対処方法や、注意喚起をしていったり、さらに、身を守る方法を提示していくことも考えています。

また、冊子は、女性だけが見る物ではなくて、男性にも見ていただいて、女性の支援を行うときに理解を深めていただければ、とも思っております。

【資料4】「委員プレゼンテーション資料 五十嵐ゆかり委員」p18～19 参照) 次に、「共助」についてですが、普段からのコミュニケーションがやはり大切だということは、いつも言われていることだと思います。しかし、コミュニケーションは、世代によって取りやすい対象が異なるという現状もあります。

【資料4】「委員プレゼンテーション資料 五十嵐ゆかり委員」p20 参照) まだ、ぼんやりとしていることではありますが、災害時にコミュニケーションを取りやすくするために、防災や避難所運営に関するキーワードのようなものが考えられたらいいのではないかなと思っております。

例えば、ママと赤ちゃんの「あいうえお」のような大切なポイントを盛り込んだ言葉のキーワードのようなものがあるといいのかな、と思います。皆さんに浸透している料理の「さしすせそ」があると思うのですが、そのようなイメージで考えられて、それが避難所でそれぞれが役割を取るときへとつなげていければいいのかなと思います。例えば、私は赤ちゃん和妈妈の「あいうえお」をするから、あなたは高齢者の「あいうえお」をしてください、というように、そのキーワードを通じて協力をスムーズにできるといいのかなと思います。行動を口に出して確認できるということからも覚えやすいと思います。

また、知らない人同士ではやはり話しにくいということがあるので、例えば共通の役割を持つことで知らない人とも一緒に協同しやすくなると思います。避難したときに、避難所で一安心ということだけではなくて、集まった人で協力し合えるように。普段から災害時に自分はどんなことができるのかを考えられるようなことも促していけたらいいと思います。

【資料4】「委員プレゼンテーション資料 五十嵐ゆかり委員」p21 参照) これは学習の定着率を示す「ラーニングピラミッド」というものですが、この図をご存じなくても、

皆さんはきっとご自身の経験として、ご存じではないかと思えます。これが示しているのは、読むだけでは10%しか記憶に残らないということですけれども、自ら体験をしたり、他の人に教えることで定着率がグッと上がるということを示しています。

【資料4】「委員プレゼンテーション資料 五十嵐ゆかり委員」p22 参照）これらを踏まえまして、冊子には「思わずだれかに伝えたい内容」を盛り込んでいけたらいいのではないかなと思っています。人に伝えることで、伝えた人も伝えられた人も冊子で学んだ内容が定着していきますし、状況設定をして、自ら考えて準備するなどの行動を起こすことで、体験として定着していくのではないかなと思っています。

また、「共助」は、先ほどご説明したような協同を促進できるような合言葉や、キーワードが考えられればと思っております。さらに、自分ができることを確認して、取れる役割を考えていくことを促すことで、防災意識の芽生えを支援できたらと思っております。以上です。

○池上委員長 ありがとうございます。それでは引き続いて、私のプレゼンをさせていただきます。

私は、平成元年前後に都の生活文化局の地域団体リーダー交流会の企画委員をしていました。委員を5年間しているうちに、後半の2年間座長を務めました。その後、東京消防庁の防災シンポジウムのパネラーとしてお声がかかりました。私は東京YWCAで水泳やキャンプのリーダーを若い頃からしており、無人島のキャンプでリーダーの経験もあるため、その経験をパネラーとして話したら、ちょうど客席に市民防災研究所の当時の理事長さんが来ておられて、その日のうちに私は市民防災研究所の創設者である篠野次郎に引き合わせていただき、そこから意気投合して防災の道に入りました。まだ25年そこそこですが、いろいろな勉強をさせていただきました。

今は、東京都の防災会議と震災復興検討会議、それから住宅防火対策推進協議会、火災予防審議会の地震対策部会というところで委員をしています。昨年「東京2020オリンピック・パラリンピック環境アセスメント評価委員会」委員もしており、いろいろ勉強させていただいております。

先ほど知事が無電柱化のお話をされましたが、私も昨年、国交省の無電柱化シンポジウムにパネラーとして出席した後、「無電柱化推進のためのあり方検討委員会」委員をしています。無電柱化に関して何も勉強していないのにどうしようと思った時に、ネットで検索したら小池百合子都知事が書かれました「無電柱化革命」を知り、さっそく買って、私のテキストにさせていただいております。そういう意味では、大変タイミングよくこの委員会にも入らせていただいて、ありがたいと思っています。

【資料4】「委員プレゼンテーション資料 池上三喜子委員」p2 参照）それで、「今日、明日来るかもしれない災害に備えてあなたは何をしていますか？」という問いを私の周辺の人にいたしますと、大体の方が「3日から1週間の食料と、そうですね・・・」という返事が返ってくるのです。その前にもっと大事なことがあるでしょ。それは、「怪我をしな

い・命を落とさない・火事を出さない備え」と伝えます。食料等は生き残ってこそ役に立つものなのですよ、と最近お話をしています。そこがとても大事で、順序を逆にしないことです。まずは怪我をしない、生き残る、火事を出さない。

3.11 の時を思い出していただくと、分かりやすいのです。あの時、私も帰宅困難者の一人になったのですが、歩道は人の波、車道は車で渋滞でした。あの時に思ったことは、怪我をしたり、火事が出たときに、この状態だと救急車も消防車も通れないと思ったのです。それ以来、その話をすると、皆さんが納得して私の話を聞いてくださるようになりました。

【資料4】「委員プレゼンテーション資料 池上三喜子委員」p3 参照）「女性視点の防災ブックで伝えたいこと」ですが、この黄色い「東京防災」について、私たちの防災仲間から「人のつながりの記述がちょっと少ないんじゃない？」と言われました。私も人のつながりがとても大事だと常々思っている者の一人なので、その部分がもう少し鮮明に表現できたらなというふうに思っています。

【資料4】「委員プレゼンテーション資料 池上三喜子委員」p4～5 参照）「いざという時に、人のつながりがものを言う」と書きましたが、内閣府の「一日前プロジェクト」という十数年、被災地と被災者からいろいろとお話を聞いて、それを物語にしたものがあります。「一日前プロジェクト」と検索していただくと、今までの物語が約1,000件弱見ることができます。それは地域の広報誌に、自由に使ってほしいということです。でも、意外に知られていないので、今回ご紹介したいと思います。

2007年の新潟県中越沖地震の時、ご近所のみんで助け合えたという物語がありますので、ちょっと読んでみたいと思います。「電気は翌々日で、ガス・水道は8日後に復旧しました。夏だからやっぱりお風呂とかに入りたいじゃないですか。でも、水も何も無い、そんな時に近所に引っ越してきた人が、水が使えるからお風呂に入りに来なよと言ってくれました。一週間水が出なくて、洗濯は大変だったんですが、近所の方が私の実家は水が出たよと言って、洗濯を持って行ってきて、全部洗濯機で洗ってくれて、後は干すだけにして戻してくれました。本当にありがたいと思いました。それから、うちは市内でもすごく復旧は早い方だったので、子供の部活の友達が帰りにシャワーを浴びに来たりしたこともありました。お隣がカップラーメンはいっぱいあるんだけど、火がないんだよねと言え、うちのカセットコンロを貸してあげたりしました。何か地域のみんが本当に助け合ったなという感じがします。」という記述ですが、大事なものは、人のつながりです。

兵庫県「人と防災未来センター」の河田先生のおっしゃったことが新聞に出ていたのですが、「いくら装備がハイテクになっても災害対応はあくまでローテク。人間が被害を受けるのだから、対応するのは人間だということは忘れてはいけない。」と。私も同感です。「東京防災」発行後の改正点とか、それから防災教育が大切で、大事なことは繰り返して学ぶ機会を作るといふ、そういう環境を整えたいと思います。ありがとうございました。

それでは、国崎さん、よろしく願いいたします。

○国崎委員 はい。私は、阪神淡路大震災から女性の視点・生活者の視点で、防災の研究・

実践をしてみいました。

私自身は、22年前にどうして我が国の防災は男性視点で考えられているのだというところから、もし私だったら、このように防災を考えるのにということで、独自の視点で防災を提唱してみいました。今、このように席上にも多くの防災に関係する女性の方を見て、22年の間に、これほどまでに女性が増えたことに非常にうれしくも思っております。

私は、自治体の防災アドバイザーのほかに、国の防災関係の委員を務めております。これまでに歴任しましたのは、中央防災会議の専門調査会であったり、総務省の消防審議会であったり、気象庁の委員であったり、各省庁の防災に関わる委員をしております。

【資料4】「委員プレゼンテーション資料 国崎信江委員」p2参照) また、いち早く被災地に入りまして、支援活動をしております。一般的なボランティアというよりは、例えば、昨年の熊本地震では、一番被害の大きかった益城町に入りまして、西村町長から益城町の防災アドバイザーを就任いたしまして、特に被害の大きかった、混乱していた避難所の運営支援を行って来ました。

先ほど、五十嵐委員からもお話がありましたように、必ずと言っていいほど、避難所では同じ問題が繰り返されてきております。その中で、やはり、なかなか声が出しにくい、女性特有の問題というものがあまして、そのような視点からどのように問題解決をするのかということと直接的に携わって来ました。

【資料4】「委員プレゼンテーション資料 国崎信江委員」p3参照) これは参考資料になりますけれども、日本で初めてトレーラーハウスを福祉避難所として活用するというところで、町長に提言をいたしまして、導入をさせていただきました。福祉避難所、本当は仮設住宅として使いたかったのですが、数が足りないということで福祉避難所として活用をいたしました。

【資料4】「委員プレゼンテーション資料 国崎信江委員」p4参照) それから、防災教育の重要性が国内だけでなく、海外でも普及しておりまして、過去に大きな地震がありました、インドネシアやパキスタンでも防災教育を提唱してきております。

【資料4】「委員プレゼンテーション資料 国崎信江委員」p5参照) 国の委員会の中で、長いこと勤めており、もう古株になってきましたが、政府の特別機関の一つ、「地震調査研究推進本部」があります。文科省が事務局なのですが、私は地震本部の政策委員、および総合部会の委員、そして防災科学技術委員会の委員でもございます。

こういった委員に、私のような防災アドバイザーが入っているのは非常にまれで、国公立の京大や東大の教授の皆様と席を並べているわけですが、その中で私が果たす役割というのは、生活者の視点・国民の視点で、この防災科学技術をどのようにして社会に実装させていくのか、利活用をしていくのかということの橋渡し役を任されているのではないのかということと、理解して勤めております。

【資料4】「委員プレゼンテーション資料 国崎信江委員」p6参照) 地震本部では、このように各県の地震評価をしております、熊本でも過去にこれほどの地震があつて、明

治 22 年にも今回の熊本地震と同じようなタイプの地震があった。ただ、これがあまりにも知られていなかったがために、熊本では地震は少ないというふうに思われていたということがあります。

このような中で、科学の知見が、あまり国民に浸透していないということの実態を重く受け止めております。

（【資料 4】「委員プレゼンテーション資料 国崎信江委員」 p7 参照）常にどのような災害対応が必要かといった中で、大きく 3 つの柱がございまして、防災は大きな災害が起きて、意識的に流行り廃りのように持っていくものではなくて、生活に根付かせていかなくてはならないというふうに思っております。これは後で、しっかり話をしたいと思いますが、生活に根付かせるために女性の力は欠かせないと思っております。

さらに、生活および事業の継続や、自助と言われますけども、自立して、再建していく、このような対策も重要ですし、何よりも私が強く言っておりますのが、そろそろこうすれば助かるのではないかという感覚的な防災ではなくて、我が国の蓄積された科学の知見を用いて、科学的に根拠のあるエビデンスを用いた防災を浸透していきたいというのがあります。

（【資料 4】「委員プレゼンテーション資料 国崎信江委員」 p8 参照）今日は、皆様に動画でお示しできませんが、国では防災教育に資するような様々な振動実験を行っております。

今まで感覚的な防災という中で、机の下にもぐりましょうということが言われておりましたが、それは条件によって守れますが、条件によっては守れないというようなことも含めて、科学の知見を防災に生かしていきたいというふうに思っております。

私自身が、実践者といたしまして、かなり試行錯誤して 22 年間やってまいりましたが、具体的にこうしましょうではなく、どのようなことをすれば生活に根付くのかというところで、具体的な事例というものを常に示してきました。

（【資料 4】「委員プレゼンテーション資料 国崎信江委員」 p9～10 参照）せんえつではございますが、これが我が家です。できる限り防災を意識させずに、というところも考えてまいりましたし、それから現実的な解決で防災力向上の提案ということで考えてもきました。

（【資料 4】「委員プレゼンテーション資料 国崎信江委員」 p11～12 参照）最後になりますが、様々な新しい視点で防災を常に提言をしてまいりまして、代表的なものが「家庭内流通備蓄」になります。

非常食という固定観念を一度捨てて、家にある食材を災害時にも食べましょうということです。この考えが広く全国でも受け入れられてきてまして、東京都では、「都民の備蓄推進プロジェクト」ということで、この考えを取り入れていただいております。

（【資料 4】「委員プレゼンテーション資料 国崎信江委員」 p13 参照）重要事項は、女性目線の防災ということで女性の特性に配慮し、取り組みやすさ、分かりやすさ、そして

そこに楽しさがあって、さらに男性が女性を支援する際に役立つ情報であって、防災の固定観念にとらわれすぎず、現実的に受け入れやすい防災の提案をしてまいりたいというふうに思っております。

（【資料 4】「委員プレゼンテーション資料 国崎信江委員」 p14～15 参照）特に、IT を使ったスマートフォンのアプリを活用した防災もあっていいでしょうし、それから災害用ダイヤル「171」だけでなく、それらを踏まえて広く検索できる「J-anpi」というものも広く普及していきたいと思っておりますし、お伝えしたいのは、新しい視点の防災を普及していきたいというふうに思っております。以上です。

○池上委員長 ありがとうございます。それでは、田中美咲さん、よろしく願いいたします。

○田中委員 よろしく申し上げます。私は、一般社団法人防災ガールで団体の代表理事を務めさせていただいている、田中美咲と申します。

私は、東日本大震災をきっかけに、当時、IT 企業に勤めていたのですが、会社を辞めて福島県に震災後、移住して、福島県庁の下で、県外避難を余儀なくされた方向けの情報支援の事業責任者をさせていただいておりました。

（【資料 4】「委員プレゼンテーション資料 田中美咲委員」 p3 参照）その時に、つながりだったり、知恵を頂いて、どのようにしたら同世代に防災を広められるかというところを検討していたのですが、私の友人たちみんな総じて、こんな言葉を言うのです「楽しくない」、「ダサい」、「めんどくさい」、「分かりづらい」、「てゆうか、まじ無理」というのが私たち世代の防災に対するイメージだったのです。

悔しながら、命にかかわることなのになんでこんなことになるのだろうと思いつつも、正直な気持ちとして理解もすごくできていました。

（【資料 4】「委員プレゼンテーション資料 田中美咲委員」 p4 参照）なので、どうしたらいいのだろうというところから、私たち団体としては、防災自体そのものを同じことを繰り返すのではなくて、これからのフェーズに変えていくことが必要だと思い、団体を立ち上げました。

（【資料 4】「委員プレゼンテーション資料 田中美咲委員」 p5～7 参照）今、設立してから4年半経つのですが、私たちはこれまでの防災をどのようにしたらこれからの防災に変えられるだろうと、プロトタイプを回していたのですが、例えば、防災グッズも左側の物は、機能性は重視されているのですが備えたくなる物ではなかった所以我们は備えたくなる物とか、むしろプレゼントしたくなるぐらいの防災グッズを開発したり、あとは被害想定を表し方も、左側が南海トラフの被害想定なのですが、これが 160 ページは一般人の私たちとしては本当に見にくくて、正しいことは書かれていると思うのですが、見たいものではなかったもので、同じ用法をインフォグラフィックとか、ピクトグラムとか、見たくなる情報に変えてきたり、あとは避難訓練なども、位置情報とかゲーミフィケーションというようなモチベーションをどうアップさせながら避難訓練させるのか、設計をさせて

いただきながら、いろんな行政の方々と一緒にやらせていただきました。

【資料 4】「委員プレゼンテーション資料 田中美咲委員」 p8 参照）そうすることで、少しずつ民間レベルで防災のムーブメントが起こり始めていまして、今ネットで「防災」と検索をすると、防災ガールのサイトが上位に来るようになっていまして、正しい情報や確かな情報を求めると同時に自分たちにとって身近な情報を知りたいという人たちが増えてきているのだなということが、このデータからも分かるなと思っています。

【資料 4】「委員プレゼンテーション資料 田中美咲委員」 p9～10 参照）それと同時に私たちはこの4年間でこのような市民型のムーブメントから、企業、行政、学校と約 70 社以上の方々と4年間を通して連携させていただきました。

【資料 4】「委員プレゼンテーション資料 田中美咲委員」 p11～12 参照）そこから、おしゃれだったり、分かりやすかったり、これからの防災をいろいろ防災ガールと何か連携できないかと民間レベルでも、今うちの団体では全国海外から 120 名以上のメンバーが携わっているのですが、防災の専門家は正直なところ一人もいないのです。

でも、それが私たちは強みだと思っていて、みんな今大学生から社会人 10 年目ぐらいまでの子がメインの活動をしているのですが、IT だったり、建築だったり、不動産だったり、それこそ保育士がいたりとか、ママがいたり、行政職員もいるんですけど、みんなそれぞれの面から防災に携わるからこそできる防災のアイデアが生まれているなと思っています。

【資料 4】「委員プレゼンテーション資料 田中美咲委員」 p13 参照）そんな中、これが私たちが感じた「東京防災」の正直な気持ちだったので、直接言ってしまうと思ったのですが、本当に見た目は素晴らしくて今までの防災の教科書とは全然違うので、面白かったのですが、中身としては思った以上に良くなかったなと感じています。

【資料 4】「委員プレゼンテーション資料 田中美咲委員」 p14 参照）その理由を3つお伝えしますと、1つは、そもそも私たち世代からすると、生活とか家族の概念がもう違って、「東京防災」の中に書いてある家族はやっぱりパパとママという性別、男、女がいて、子供が何人かいて、一軒家を持っていてとか、車を買うとか、いわゆる今までの家族像をそのまま反映されていて、それこそ私なんて家を持っていなくて、4 都道府県ぐらいを毎日生き歩いているぐらい旅をしながら生活をしている人たち、フリーランスとかの情報があんまり入っていなかったりとか、これからの防災をするのであればもう少し変化を共にしていくということが必要なのではないかなと思っています。

あとは結論が書かれていないというのは一部で、結局何をしたいかが分かりませんでした。

最後に、曖昧な表現が多いのは、いい意味でも正しい情報を書く、間違った情報を書かないようにするという意味では凄く正しかったのですが、でも結局本当に何をしたいかが分からなかった。

【資料 4】「委員プレゼンテーション資料 田中美咲委員」 p15 参照）具体的に言うと、例えばこのキッチンとか、リビングの防災のページに関しても、左側が既存の「東京防災」

で、右側がまだ私たちが読みたくなる「東京防災」なのです。

パッと見たときに、自宅に潜む危機は分かりますが、これがどこなのかが分からなかったもので、その位置を一番上に載せるとか、この左側だと、下の4行をすべて読まないで結局何をしたらいいか分からなかったのですが、ちゃんとそれを要約して、このリビング、キッチンではこれをやるといいよというのが分かったうえで、気になる人がより見るという形を取るとか、伝え方をもう少しよくするだけでも私たちは見たくなる防災になるのではないかなと思いました。

【資料4】「委員プレゼンテーション資料 田中美咲委員」p16~17 参照）最後になりますが、本当に変化していく世の中なので、その時代にも合わせて、これからの子供たちだったり、まだ生まれていない、未来を生きる人たちに向けても、防災が継続できるように、楽しい防災にしていきたいと思っています。

私たちの強みは、これからを担う若者に伝わる表現に翻訳ができることだと思っていますので、この場にご一緒できてとてもうれしく思います。よろしくお願いします。

○池上委員長 ありがとうございます。これからを担う若者に伝わる表現に翻訳できること。非常に印象に残りました。それでは次に、富川万美さん、お願いいたします。

○富川委員 NPO 法人ママプラグの代表、富川と申します。よろしくお願いします。

まずは、この場に今回呼んでいただいたこと、大変光栄に思っております。頑張りますので、よろしくお願いします。

まず、女性視点の防災ブックについて、プレゼンを始めさせていただきます。

【資料4】「委員プレゼンテーション資料 富川万美委員」p2 参照）私たちNPO 法人ママプラグは元々、LLP として活動を開始した組織です。

2007 年にママのキャリアをもっと生かした仕事をしたいなということで、例えば商品開発や、書籍の出版事業をスタートさせていただきました。

集まったメンバーとしては、編集者や PR、あとはライターとか、デザイナー、あとは人材育成のプロを集めて、いろいろなプロジェクトを展開しているというチームでした。

ただその時に、2011 年、3.11 が起こりまして、正直私たち小さな子供を抱えているメンバーばかりだったので、直接現地に出向くということが物理的に難しかったということがあって、母子の防災事業を開始するきっかけとなったのが、関東に避難をしている母子を中心に、こちらに集まって来ていらっしゃるお母さんたちに被災地の支援活動をしたのが大きなきっかけです。

マスコミの出身者が多かったものもありまして、その活動の中から出てきた体験談というのが本当に恐ろしくリアルな話で、まったく防災に興味がなかったメンバーたちも、それぞれがやっぱりそこで何か防災スイッチが入るというような体験談が大変多くありましたので、被災体験をお会いした皆さんにお聞きして、取材をしたのが大きなきっかけです。

そのプロジェクト名は、「つながる.com」というプロジェクトだったのですが、その時に体験談をまとめて「子連れ防災手帳」という書籍を出版するにいたりしました。

その書籍を出版してから、だいぶその体験談がやっぱり大変貴重だというふうに、私達も伝えなければいけないという使命感もありまして、2013年にNPOとなりまして、今「アクティブ防災」という形でセミナーを中心に活動しております。

【資料4】「委員プレゼンテーション資料 富川万美委員」p3参照）今、どのような活動をしているかというところ、6つの柱を立てておりまして、まずは出版事業、あとはセミナー、イベント、監修、コンサルティング、人材育成という様々な柱の中から、いろんな形で防災を広めております。

【資料4】「委員プレゼンテーション資料 富川万美委員」p4参照）これまでの実績としましては、特出すべきところは、セミナーの参加者数だと思っています。私達、大体平均3500名ほどのパパとママを対象にしておりますので、その辺のリアルな声というのを本当に伝えるべきところなのかなというふうに考えております。

【資料4】「委員プレゼンテーション資料 富川万美委員」p5～6参照）この東京都の防災に関して、私達ママプラグだからこそお伝えできることというのが3つあるかなと感じています。

まず、本来の持ち味であります企画力というものを私達とても強みにしておりますので、そういうところを生かして、今既存の防災ってどうしてもやりたい人がやるというか、やっている人はすごいというところだと思いますので、そうではなくて、やはり気づけば備えにつながっていて、実はこれが役に立って良かったねというような日常生活の延長線にある防災というのを促す提案を企画していきたいと思っています。そのキーワードとしましては、やはり女性は、「かわいい」だったりとか、「おいしい」、「ほしい」、「安い」というようなキーワードがとても響きますので、そのようなところを中心に企画をしていけたらなと思っています。

次が、既存の防災イメージ。やはり、どうしても固いイメージがまだついて回っておりますので、そこを楽しく、アクティブになれるアイデアの提案をしていきたいと思っています。ここのキーワードとしては、やはり「楽しい」、「それ知ってる」だったり、「またやりたい」というふうに思わせるところが基本になるかなと思っています。

次が、先ほど池上委員長もおっしゃっていましたが、人とのつながりというところを意識させる。地域の一員として、自分がどんどん人とつながっていくというところを自覚させるというところで、巻き込み型の防災というところの提案をしていきたいと考えています。ここのキーワードとしましては、地域コミュニケーションだったり、あとは地域の孫づくり。これは自分の子供をもっと地域の温かい目で見守るような仕組みづくりをしていきたいというところなんです。

あとは、今あるようなママ友をもっと災害時にも使えるようなネットワークづくりというのをおすすめしていきたいと考えています。私達の一番の強みというのが、先ほども申しましたが、特にママ層の防災に関する知識や、リアルな意見などを集約して、ターゲットに効果的な企画を提案できることだと考えています。

そして、この防災ブックに期待する一番の思いというのが、私たちが目の当たりにしてきました防災ゼロという状況。まったく興味がない人、または興味があっても何から始めたらいいかわからないという人を皆無にしていきたいというのが、本当に強い思いであります。

この防災が本当にモデルケースになりまして、日本が防災大国になれるようにこのプロジェクトを皆さんで盛り上げていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

○池上委員長 ありがとうございます。それでは、お待たせいたしました。中島千恵さん、よろしくお願いいたします。

○中島委員 よろしくお願いたします。ちょっと、今までとはずいぶん場違いな感じのものになるのですが、よろしくお願いいたします。株式会社マガジンハウス an・an 編集部の中島と申します。

軽く自己紹介をさせていただきますと、an・an 編集部勤務して11年目となります。編集者としては、15年目を迎えます。大学卒業しまして、すぐに雑誌の編集者となりまして、今にいたっています。

【資料4】「委員プレゼンテーション資料 中島千恵委員」p1参照) ちょっと自己紹介代わりというか続きに、「an・an」というものについて少しお話させてください。

1970年3月に創刊しました、日本初の女性ファッショングラフィック誌です。昨年、創刊2000号を迎えまして、ちょうど本日水曜日が発売日なのですが、本日の手相特集で2053号を迎えました。20歳から34歳女性の知名度は、96.9%とほぼ全員が「an・an」という雑誌を知ってくださっているという状態です。特集するものとしては、恋愛、美容、ファッション、占い、食、ダイエットなど、女性の興味のあるテーマを毎週特集しております。この右下にいるパンダのアンアンちゃんがマスコットです。

【資料4】「委員プレゼンテーション資料 中島千恵委員」p2参照) 最近ですと、この半年ぐらいの特集は、猫特集ですとか、あと Perfume さんが表紙を飾ってくださった女性の生き方の特集、あとは不安解消ブックというテーマで恋愛のことだったり、結婚のことだったり、あとお金のことだったりという女性にリアルな悩みについて特集した中で、ここでも防災のことを特集させていただいて、田中さんと国崎先生にもいろいろコメントを頂いて、という感じです。あとは体系の特集、旅の特集、食べ物の特集といろいろやっているのですが、ここで同じ女性が興味を持っているもののテーマとして、一番「an・an」の中では硬派なものになりましたが、女性のための防災ブックという本を出版させていただきました。

【資料4】「委員プレゼンテーション資料 中島千恵委員」p3参照) 2011年の防災の日、9月1日に発売をさせていただきました。私は、こちらの本の企画と、一冊の編集を担当させていただきました。

一見、防災とは無縁そうな「an・an」なのですが、この場にお呼びいただいたきっかけ

になるような本を作れたということはすごくありがたいことだと思いますし、五十嵐さんの「なっても袋」のところでも出てきましたが、取材をさせていただいたりしております。

好評を得まして、新装版も 2014 年 10 月に発行されまして、全部でかなりの大きい部数の反響をいただきました。

2011 年 3 月 11 日、私は、銀座にあるマガジンハウス本社で地震に遭いました。歩いて帰宅したのですが、例えば同僚には、靴をピンヒールしか持っていない同僚もいっぱいいましたし、3 月にしてはすごく寒い日だったと思うのですが、薄着のおしゃれ着を着た友人たちもたくさんいましたし、その中、何時間も歩いてみんな帰宅していました。

いわゆる、報道ではないマスコミである私たちに何ができるのだろうというふうに考えたときに、「an・an」というせつかく女性のための本を作っているのだから、「an・an」読者に向けてどんなものが役に立つのか、どんな防災知識が必要なのか、ということをも「an・an」らしくまとめよう、それが私たちにできる最大のマスコミとしての役目なのではないかというふうに思ったことが、この本を作るきっかけでした。

実際に、いろんな方にお話をうかがったのですが、五十嵐先生をはじめ、女性被災者をサポートした方々に直接取材をすることを中心にしてデータをまとめました。危機的状況で女性を本当に守ってくれるものや、知恵を特集しました。私は、皆様のように防災の専門家ではないので、本当に防災の具体的なことについてお伝えすることは何もなく申し訳ないのですが、ただこの本をまとめるにあたって大事にしたことをいくつかお伝えできればと思います。

【資料 4】「委員プレゼンテーション資料 中島千恵委員」p4 参照) まず、編集方針の 1 としては、女性ならではのニーズを掬い上げようと思ったこと。今のスライドに入っているのは、生理用品、一回の周期分用意しようね、というものを写真に撮って掲載した実際のページなのですが、女性のニーズってとても繊細で、一見すると贅沢だと思われてしまうこともたぶんいっぱいあるのだと思います。

でも、それは贅沢ではなくて、例えば、この大変な状況を前向きに乗り切るためにはとても役に立ったりするものである。あと体を守るという意味でもすごく役に立つものである。ということを取材していて痛感しました。

こちらの、例えば生理用品も、自分が使い慣れている物がちゃんと一周分あるという安心感は、とても女性を心強くもさせてくれるということを取材を通じてすごく学びましたので、それを伝えたいなと思いました。

あと女性ならではのニーズというのは、繊細だからこそ、なかなか口に出しにくくて、伝わりづらいことでもあるので、それも伝えないといけないなというふうに思いました。

【資料 4】「委員プレゼンテーション資料 中島千恵委員」p5 参照) 編集方針 2 としては、身近にあるものを一目でパッと分かるようにレイアウトするというものも心がけました。

例えば、スペシャルなものも防災のときだけに役に立つものを、もちろん用意しておいて使えるということもすごく大事なことです。普段使っていないと特に非常時にはまったく使えないということが実感としてもとてもあります。なので、身近なもので防災のものとして使えるものをまず用意しましょうね、それにはこんないろんな使い方ができますよ、ということを示唆することを心がけました。

そして、パッと見て一目でストールだなと分かるようにビジュアルを大きく見せることも心がけました。

【資料4】「委員プレゼンテーション資料 中島千恵委員」 p6 参照）編集方針の3つ目としては、現代の人向けにアップデートした情報を伝えるということでした。

小学生の頃だったら、乾パンを用意しておきましょうというふうに教わっていたものも、それよりもずっと保存性も良くてずっと役に立って、例えば「ウイダーinゼリー」だったら、水がいらなくても接種できるのに、水分が少ないのでトイレになかなか立たないで済むという利点がある、保存性が高い、そういう時代に即したいいいものがたくさんあるので、それを今の情報として伝えることも心がけました。

【資料4】「委員プレゼンテーション資料 中島千恵委員」 p7 参照）そして、編集方針4。モノを準備すればOKというわけではなくて、皆様の今までのプレゼンにもたくさんありましたが、知識を得ることも、大切な防災であるということをお伝えたいなと思いました。

例えば、女性同士の交流の場を避難所で設けましょうという項目も作ったのですが、こういうモノを用意したらOKではなくて、知識を得るということも「防災」なんだということをお伝えしていきたいなと思いました。

【資料4】「委員プレゼンテーション資料 中島千恵委員」 p8 参照）最後は、図などを利用し、読み物として、情報を見やすくまとめるということです。

イラストを使うって実は簡単なようでもすごく難しい作業でして、そのイラストに意味がなければいけないなと私は思っていて、最大限に目を引くように、そして意味がちゃんと伝わるように、意味のあるイラストを入れるとか、見出しが一番目立つようにするというレイアウトにもすごく気を付けたつもりです。

以上、大まかな方針ですが、私は皆様と違って防災の専門家ではないのですが、この本を編集した経験や、あと普段も女性に向けて情報を編集して見せるという仕事をしていることから、編集の視点で何かお役に立てることがあればなと思っています。よろしくお願ひいたします。

○池上委員長 ありがとうございます。それでは、次第の6、意見交換に移りたいと思います。

先ほど、委員の皆様からいろいろとご意見を頂きましたが、どのような防災ブックにしたいかということ、また、読者に何を伝えるべきか、どのように伝えるべきかという観点から、ご意見を頂戴したいと思います。

どなたからでも結構ですので、よろしくお願ひいたします。

○五十嵐委員 まず、皆さんのプレゼンテーションを聞かせていただいて、富川委員や国崎委員のお話にもあったと思うのですが、やっぱり冊子を手にとってもらうということがすごく大事なかなと思いました。

内容が良くても、いろんな世代の人が手にとってくれるようなものにしないといけないとなったときに、今、中島委員からプレゼンがあったように、「an・an」の編集は素晴らしいと思うので、そのアイデアを頂きながら、見たときに手に取りたいと思うような表紙にするなどの工夫がまず一つ必要なかなと思いました。

それから、私のプレゼンの中でお話をさせていただいた「自助と共助」ですが、そこをやっぱり強調したいというのがあります。本学の学生の年齢層は18歳から22歳が多いのですが、田中委員の世代とすごく近いと思うのですけれども、学生たちに話を聞くと、やっぱり家にいるときよりも移動しているときの方が多いので、携帯できる物のアイデアを欲しいという声をたくさん聴きました。

その中で、キーワードとしては、富川委員とか田中委員がおっしゃっていた「かわいい」とか「おしゃれ」というのは、私も研修会などをさせていただいたときに、いろいろな世代の方から言われます。それは若い世代ではなくて、幅広い世代の女性からやっぱり「かわいい」というキーワードはすごく大切だと言われているので、「かわいい」とか「楽しい」ということが分かること。

それから、女性は、ちょっと荷物が多いのでバッグの中に入れたときに、やっぱりかさばらないような大きさ、重さというところが考慮できるようなものを提示していけたらいいのかなと思います。

○池上委員長 ありがとうございます。いろいろと出していただきました。

「かわいい」とか「おしゃれ」、「楽しい」、大事なことですよね。私も「楽しい防災」、「防災と言わない防災」と言う人もいるのですが、楽しくないと後が続かないということです。

その他、いかがですか。

○国崎委員 私自身が、女性の視点での防災というテーマで難しいなと思いましたのが、一口に女性と言いましても、様々なお立場があります。

例えば、ご結婚されている、されていない、未婚、既婚であったり、お子様がいらっしゃる、いらっしゃらない。年齢も生活スタイルも、現代の我が国における女性の多様な生活スタイルを鑑みて、多くの女性が女性の視点での防災ブックを見て、「あって良かった」と思ってもらえるようなものを作るためには、どうしたらいいのかと、この点が非常に悩んだところでした。

たぶん、これは女性というくくりではなく、もちろん男性にかかわることでもあると思うのですが、作る際には先ほど言いました、既存の家庭論・家族論というようなところではなく、様々なお立場に配慮した作りというものが必要ではなかろうかというふうに思っております。

○池上委員長 ありがとうございます。はい。よろしくどうぞ。

○富川委員 私たち自身が、セミナーなんかで会うお母さんたちの中には、やっぱり本自体を読まないという方がたくさんいらっしゃいます。

もちろん、妊婦さんだったり、そういう時期には活字自体もなかなか読めなかったりもしますので、やはり、その内容をビジュアル化するという事は、女性にはすごく、男性だとまたちょっと別なのですが、そのビジュアルに割と重きを置くというのは必要な面なのかなというところがあります。

あとは、お母さんたちが、やっぱり文字がワーと書いてあるものというのは本当に割と拒絶しがちだったりするので。もちろんそうじゃない方もたくさんいらっしゃるのですが。そのため、雑誌感覚で、本当に美容室なんかで読めるような、中身に書いてあることはとても重要だけれども、意外に難しい言葉がなかったなというような形で作っていただけると、すごく今までとは違ったものができるのではないかなというふうに思います。

○池上委員長 他にありますか。はい。田中さん、よろしくお願ひします。

○田中委員 いわゆる LGBT だったりとか、女性は女性でも、生活軸で変わるものがあります。それこそ心だったり、ファッションによってもまた違います。普段私はあまりスカートをはきません、今日のはいているのですが。スカートをはかない女性と、ズボンをはく女性、ピンヒールを履く女性、スニーカーを履く女性とか、いろいろなパターンを考えたうえで、マイノリティのこともちゃんと書きつつ、でも大まかにみんなが共通言語として分かるものとジャンル分けをする必要はあるかなとは思っています。

○池上委員長 ありがとうございます。特に、避難所運営のとき等、女性と男性だけではなく、LGBT の視点もとても大事だと思っております。ほかに、はい。よろしくお願ひいたします。

○中島委員 よろしくお願ひします。先ほどのプレゼンでもちょっとお話をさせていただいたのですが、特に女性は、身近なものをいかに上手に使うかということがすごく大事なかなと思っています。

ストール一本で腰に巻いたら、緊急時のトイレのときに腰を隠すことができるよとか、細く巻いたらロープの代わりに使えるよとか、ストール一本でもいろんな使い方ができるんだよということを示すと、先ほど五十嵐委員もおっしゃっていましたが、物を減らす、かさを減らすという意味でもすごく役に立ったりもします。そういう知恵は、女性は覚えておくとすぐに応用ができると思うのですごく役に立つのではないかということと、あと、「an・an」の防災ブックを作ってすごくうれしい誤算だったなと思ったのが、男性の方に喜んでいただけたということでした。女性用に作ったつもりだったのですが、女性はこんなことを考えていたのかということが男性にも伝わりやすくて、伝わったら「じゃあ、こうすればいいんだね」と、それはうれしい誤算ではありました。

なので、女性だから守ってほしいとか、女性は例えば体力がないからということではなくて、「お互い違うんだよね」、ということが分かり合えるような本になればいいのかなと思ひました。

○池上委員長 ありがとうございます。身近なものを使える工夫というのは、とても大事ですね。わざわざ防災のため、災害後に使うものということではなくて、生活の中に溶け込むというのを何人の方がおっしゃっていましたが、とても大事な視点だと思っています。ほかにいかがでしょうか。はい。お願いいたします。

○五十嵐委員 備えに関しては、やっぱり自分事として考えなくてはいけないと思います。物のこともあります。体験のことも考えていく。「東京防災」の中にもシミュレーションの事例がありましたが、もう少し女性の日々の状況に合わせて、こんなときにこんなことあったら困る、というような事例を出すというのはどうだろうと思っています。

例えば、「22時。女子会の帰りにお酒を飲んでちょっとほろ酔いの状態で地下鉄に乗ったら大きな揺れがありました。あなたは、どうしますか」など、そういったときに自分がどうすればいいのか、ということを実前に考えられるようなシミュレーション問題を出して、自分で事前に考えておけるような提示もあるといいと思います。

あとは、いろんな世代の方が自分の世代と同じ人がこういった体験をして、こういったものが便利だったよ、というような体験談というのは強みだと思います。そういうことを教えていただいて、それを見ると、これは準備しなきゃいけない、と思うこともあるので、そういった体験談を世代別に入れていくというのもいいのではないかと、と思っています。

○池上委員長 いずれの災害にも語り部というのが必ずおられて、とてもいい教訓を私たちに伝えてくれますよね。そういうのも、時に触れていけたらなという感じは、私はあります。すみません、田中さん、どうぞ。

○田中委員 先ほどのほろ酔いのことから、そういえばと思ったのですが、私たちの世代から「これは違うよね」とよく出るのですが、防災と防犯のバランスが取りにくいなとすごく思っていて、地域の人とコミュニケーションを取ろうと、よく教科書には書いているのですが、地域の人とコミュニケーションを取ることによってストーカーになる人が結構周りですごく多かったので、近隣住民とコミュニケーションを取りたくないのです。

それこそ、個人情報の問題でもありますが、自分を開示しすぎることで、それが噂になってほかの人にシェアされちゃうという情報がたくさんある。その恐怖感というのを持ちながら暮らしている、ソーシャルメディアを毎日使う世代とのバランス感、うまいこと伝えるか、こういうやり方もあるよ、という提案とかをいくつか出してあげるといい気がします。

○池上委員長 ありがとうございます。いろんな生活の仕方というのがありますからね。

個人情報というのは、本当にいろんな場面が出てきますが、実は私もしものときの「緊急あんしんシート」、東京防災救急協会が発行しているものですが、誰でも300円で買える物です。これには、もちろん私の名前と血液型、住所、それから娘二人の携帯番号、主治医、かかりつけの病院というのがありますから、もし私が交通事故等でものが喋れないときにも、これを見てくださると東京の場合は、救急隊員が真っ先にこれを見てくれます。よく事故がありますと、「ただ今、身元確認中」とありますよね。特に働いていない方は、

名刺も持っておりませんし、救急隊員も持ち物の中を開けていろいろ調べるのはとても抵抗があるようです。

せっかく、こういういい制度がありますので、できるだけ自分の責任でどなたでも見ていいですよという、高齢になればなるほど、私は何者かというのを自分からアピールしていかないと地域の方もなかなか分かっていただけないそのほかいかがでしょうか。

○国崎委員 私のプレゼンで途中になってしまったのですが、私自身が実践してきたことでもあるのですけれども、やはり生活に防災がなじんでないところで、防災を、防災をと言われても、やっぱり生活上無理してしまうというところがあります。

私が、防災の普及で重要なのは、「これだったらやってもいいかな」と思ってもらえるような、むしろ「それも防災なのね」と思ってもらえるような視点かなというふうに思っておりまして、例えば家にあるもの全てが動きますから、「固定をしましょう」といったところで生活雑貨類を固定することは、やはり難しいわけです。

そこで、インテリアの素材を柔らかいシリコン製とか、布製とかに変えるだけで、また、例えば写真立て一つ、木のフレームの写真立てがブンッと飛んでくると、紙製のフレームの写真立てが飛んでくるのでは被害は全く変わってくるわけです。

このような視点で、インテリアも楽しみながら安全性も両立できる、そういった女性ならではのアイデアというところをできるだけ多くやっぱり紹介していく、「これなら！」と思ってもらえるようなエッセンスをたくさん盛り込んでいけたらいいのではないかなと思います。

○池上委員長 ありがとうございます。

つい最近、吉村昭さんの文章を読んでいました。1923年の関東大震災の時に、被服廠跡で飛び火による火災で、大八車にいろいろ積んできたところに火が付いて大変な思いをして、死者も多く出しています。そのこともあり、防災のリュックと言いますが、「僕は反対だった」と。ああいう場面になったときに、リュックを背負ってそこに飛び火がついたら大変だろうと。

私も火災が起こったら、本当に東京は大変なことになると思っているのですが、その意味で国崎さんが書かれておりましたが、たくさんポケットのあるベストがとてもいいと思って、背中の丸いおじいちゃん、おばあちゃんもあれだったら背負えるねと。あの辺もご紹介できたらということと、子供はやっぱり子供が大事なものでありますよね。

だから、親子で家の中はどこが危険だとか、それからあなたにとって何が一番大事なの、気に入っている絵本かもしれない、おもちゃかもしれない、そういったことをお子さんも交えてやっていけたらいいなというふうに思っています。ほかはいかがでしょう。はい、どうぞ。

○富川委員 時間もないので、手身近にお伝えしたいのですけれども、私はママ目線なのでママに特化してお話させていただきますと、やはり子供を自分の手で守りたいというお母さんたちが100%だと思います。

その中で、じゃあ実際にお母さんが守れる確率というのは、災害時は大変低いわけです。そのときに何が必要かという、やっぱり子供が自分で危機、危険を察知して、逃げ出す力や自分で自分を守る力というのをいかに育てるか、いかにそこを教育するかというところだと考えています。

なので、私たちはそれを「子供の生きる力」というふうにお伝えしているのですが、「子供の生きる力」というのをお母さんたち、お父さんたちがどういうふうに伝えていくか、その伝え方も大変重要だと思いますので、その辺もぜひ盛り込んでいただけるとすごく価値のあるものになるのではないかなというふうに感じています。

○池上委員長 ありがとうございます。予定の時間になりましたので、これで切らせていただきます。委員の皆様には、話し足りない部分は2回以降、存分にお話いただきたいと思っております。

それでは、次の議題に移らせていただきます。先日、知事が熊本の保育園を訪れた際に、保護者の皆様と液体ミルクの普及について意見交換をされておりましたが、当委員会においても議題2の「乳児用液体ミルクの備蓄・活用について」、意見交換をしたいと思います。

まずは、液体ミルクについて事務局よりご説明をお願いいたします。

○事務局 それでは、液体ミルクの特徴や現状の課題等について、簡潔にご説明をさせていただきます。

まずその特徴でございますが、特色として主に3つの点をあげております。

1つ目は、育児の負担軽減でございます。時間が限られているときや、お母さんが不在の時などにおいても、簡便に授乳が可能となります。

2つ目として、調乳の手間が省略され、外出時の所持品も少なくなること。

また3つ目として、災害時の備えとしても活用が可能であることであります。地震等によりましてライフラインが止まった場合でも、水や燃料等を使わずに授乳することができるため、災害時の備えとしても活用が期待をされております。

次に、主な課題でございますが、3点挙げておりますけれども、1つは、値段が高いこと。

また2つ目として、赤ちゃんの好みに左右されること。

3つ目として、店頭寿命が短いということなども指摘をされているところです。

次に、被災地での活用事例となります。これまで東日本大震災や、熊本地震の際に、フィンランドに住む母親や企業などの協力で提供されております。

最後に、「課題と方策」についてでございますが、現状といたしましては、「食品衛生法」に「乳児用液体ミルク」については規定がなく、現在日本では、「乳児用液体ミルク」としては製造・販売できないことになっております。乳児用液体ミルクを国内で製造・販売するためには、安全性等の面から法令上の規程整備が必要でございまして、現在、厚生労働省において規格基準等について検討中でございます。

都といたしましても、国に対して、「国内で製造や販売ができるよう法令上の規定整備を

行うこと」を要望しておりまして、本年2月には小池都知事からも直接要請を行っているところでございます。説明は以上でございます。

○池上委員長 ありがとうございます。それでは「液体ミルク」について小池都知事さんからご発言頂きたいと思っております。よろしくお願いいたします。

○小池知事 この点につきまして、ずっと鶏と卵の議論が続いておりまして、やはりニーズを作るというか、需要を作るということが生産者を促す最大の方法ということかと思っております。

ほかの国々でも既に販売されているということで、衛生基準等々は、これはある意味、オールワールドの部分もあろうかと思っております。ぜひ、さらに消費者の観点から声をあげていただくことが、新製品というか、それを生み出すということになるのではないかなと思っております。

これから少子化でますますニーズが減るとこの業界の方がおっしゃるのですが、しかし日本の製品というのは単に国内のみならず、海外にも発信できますし、私がいろいろと連携関係にありましたフィンランドなどは、そもそも人口が500万人の、東京の3分の1ぐらいしかない所で乳製品を作って、販路は、例えばヨーロッパとか全体でもあるんですよ。

だから、ちょっとした考え方の違いだと思っておりますが、まずニーズを作るということだと思います。これは、子育て中のお母さんや、それからミルクを作るのを手伝ってくれるイクメンとかも平時の夜中に起きて、そのミルクを調合するということ。まあ母乳が一番ということなのですが、そういう意味では粉ミルクに続く2つ目のラインとして可能性は大にあると思っております。むしろ声を上げていこうということでございます。

○池上委員長 ありがとうございます。外出の際にも、これができるといいですし、もちろん災害後も非常に役に立ちますし、それから共働き世代が多い中で、こういう物ができると父親にも赤ちゃんに与えるということが可能になるので、とてもいいと思っております。以上ですが、皆様。はい。

○国崎委員 私は、新潟の中越地震で赤ちゃんのいるママさんに直接ヒアリングをして、その被災生活の調乳ミルクの問題を知りました。哺乳瓶を洗わずに、不衛生なままで何回も繰り返し使用していたり、雑菌の残る生ぬるい温度で仕方なく泣くからあげたというような、そんな実態があったわけです。

昨年、熊本地震で益城町では、まさにフィンランドからの支援でバンビの絵の付いた調乳ミルクが届きました。保育所にも配られて、益城町の職員で「ちょっと一口飲んでみようか」となり、私も飲みました。私は、脱脂粉乳の味を知らないのですが、おそらくこういう味だろうなという経験をしました。

私自身も母乳と調乳で混合だったのですけれども、日本製の粉ミルクのおいしさがありまして、それに慣れている赤ちゃんが突然このミルクを飲んで受け付けるだろうかというふうに思いましたけれども、日本で今後作ることができれば、味の部分でかなり改善されていくのではないかと思いますし、やはりメリットの方が私は多いと思っております。

これも災害時だけでなく、日頃から男性が育児にかかわる中でも非常にニーズは大きくなるというふうに思っていますので、皆様存在を知ってもらうように、作ってもらうということが大事なというふうに思っています。

○池上委員長 やはり都民の意見というか、こういう意見がエネルギーになるでしょうかね。どうぞ、五十嵐さん。

○五十嵐委員 特に災害時の備蓄品という点では、本当に素晴らしいと思います。基本的には賛成です。それから、平時においては、今、国崎委員がおっしゃったようにパートナーが手伝ったりとか、あとは外出時に使用したりという、母乳の補完として使うというところでは便利だと思います。

ただ、導入にあたり、助産師として思うところは、やはり母乳が液体ミルクに代わるものだ、というような報道にならないようにしていただきたい。また、粉ミルクとの比較で液体ミルクの方が災害時にメリットがありますよ、という説明をするという点を注意していただければと思います。

○池上委員長 ありがとうございます。そうですね。今、ご指摘の母乳が液体ミルクに代わるものという報道をしないように。あくまでも母乳が一番ですよということは、崩さないでということなのですが、ほかにありますか。

○富川委員 これもいろいろな私たちのメンバーの中でも検証した意見も入っていますが、今海外で売られている液体ミルクは、大きくペットボトル製の乳首を付ける物と、あとは紙パックで販売されている物がありまして、先ほどの国崎さんがおっしゃったように、やっぱり哺乳瓶問題というのはどの避難所でも大変大きく出ている件だと思います。

今日お持ちしたのは、アメリカ製の携帯用の哺乳瓶ですが、こういった物は今国内ではほとんど日本製という形では売っていません。液体ミルクの普及と共にやっぱりこういう携帯用に持ち歩ける衛生的な哺乳瓶の存在というのもPRしていく必要があるのかなというふうに考えているというのが1つと。

あとペットボトル型、とても便利だとは思いますが、やはり調乳をすると一日6回とか、7回、新生児になるとやっぱり母乳じゃない方は大変回数が増えますので、そういった母乳問題とか、そういったものも並行して考えていく必要があるかなというふうに考えています。

一番やっぱり必要なのは、今日本のメーカーの物が無いというところは、現役のお母さんたちにとって非常に大きな壁だと思っています。お母さんたちは、まずは母乳を推進されて、母乳じゃない方は、私もそうなのですが、混合になる。その場合も、やはり粉ミルクの成分とか、そういったところは大変気にされる方が多い中で、日本のメーカー6社の全部がというのが理想的なのですが、どこかが知っているメーカーが知っているブランドで出す液体ミルクというのが本当に期待されているのかなというふうに考えています。

○池上委員長 ありがとうございます。そうですね。6社もあって、どこからも出ていないって、液体ミルク後進国ってまたその枠で括られるのなんか悔しいですね。ほかに

ありますでしょうか。あと4、5分ございます。はい、どうぞ。

○田中委員 私はまだ独り身と言ったら変なのですが、子供を産んだ経験はありません。でも、これから出産し、子育てをする可能性がある身として、もっと私たちの出産前の世代にもちゃんとこの意味を伝わったらいいなにな、とよく思っていて、今回液体ミルクの話震災のタイミングでも聞いていたものの、自分事化されていなかったのほとんど無視のような状態でした。既存の防災の時と同じぐらい。

ただ、それこそ海外で言うと、父親二人に子供一人な家族だったりすると、母乳というものがそもそもないという世代だったりもするので、そういう人たちでも使われていたりするという事例はうかがっていて、そういう意味では皆さんにとってもいろんな選択肢の一つとして出すということは本当に選ぶ側からすると、とても大事なことだと思うので、今選択肢が少ないからこれじゃないといけないという情報だったりとか、これしかないのだというネガティブな選択肢の一個としてじゃなくて、ポジティブに選択肢を増やすということはこれからの未来にとっても必要なことだと思っています。

○池上委員長 ありがとうございます。選択肢を増やして、そこから自分の防災に合ったものを選ぶ、とても大事ですね。ほかにございますでしょうか。よろしいですか。

それでは、皆様からいろいろとご意見うかがってきました。このご意見を、防災ブックの中にいろんな形で反映できたらいいなというふうに思っています。それでは、最後に知事から一言お願いいたします。

○小池知事 大変活発な、そして具体的なご議論を頂いたものと感謝申し上げます。

今日の皆さんのお話をうかがっていて、何点か気が付いたのですが、まず行政の観点から申し上げますと、まさしくいつどこで何が起こるか分からないわけで、いろんなシチュエーションを考えた形で行政として対応策を練っておくということが1点。

それから、行政として例えば、備蓄食品の選び方などもよく考えていかなければならない。それこそ、液体ミルクもしかりでありますけれども、年齢層によって好みも違うでしょう。

先だって、食品ゼロを目指すということで、期限が切れるちょっと前のものを皆さんにも提供させていただいているのですが、「もう少しおいしいのにしてよ」と頼まれて、おいしいものは様々な素材によって加わったりすると、かえってもたないとか、いろいろあるのだろうとは思いますが、先ほど田中さんからご示唆いただいたように、やっぱり非常食でこれしか食べるものはないのだから我慢してよ、ではなくて、そういった非常食がより長持ちし、かつおいしいと。

逆に言えば、私いろんなビジネスチャンスって転がっているのだろうと思うのですよ。お話がありましたように、軽くないと、またかさばらないというお話ありましたよね、いざといった時の。それって日常から欲しいじゃないですか。だから、防災を突き詰めていくと、マーケティングでよりメーカーにとってのヒントが転がっているというふうに思いますし、それを常に一定の消費者としての備蓄をしておくということが大切だと思いま

す。

そういったマニュアルをこの本の形であったり、アプリであったり、展開の仕方はこれからの時代に合った形でやっていきたいと思えますけど、とても表紙はいいというお話でしたので、出てくるのは大体男性ばかり出てくるのだけれども、女性の目線で、それから子供さんとか、ペットとか、おじいちゃま、おばあちゃまをどうやってケアするかとかいうことで、その切り口で行くとまた新しい防災のありかたというのが出てくるのではないかなと思いました。

みんないろんな知恵を持っているので、それをこの中に入れ込んでいけばと思いました。

私も災害の被災地の中において、結局のところ食と、それから着るもの、寒い時どうするかとかのこともありますけども、衣・食、住は住の部分が失われるというケースもありますので、あとやっぱりトイレ、お風呂、非常に人間生活で当たり前の部分が失われると、どんなに不快なものか。ちなみに、私は、よく中東の方に出かけたわけですが、常に傘持っていくのです。ビニールの透明な傘じゃ意味ないのです。折り畳みの傘が一本あると、日よけになるのと、砂漠のど真ん中でそれでトイレができるとか、一枚黒い布を持っていくと、それはもうイスラムの国だったらそれ一枚まもってあれば問題ないとか、いろんな知恵があるので、ぜひみなさんの知恵を凝縮して表紙だけでなく、中身も本当に役に立つ、そんな防災ブックの仕上げを目指して今後ともよろしくお願いを申し上げます。

○池上委員長 ありがとうございます。まだまだ話し足りない部分がたくさん皆さんにもお有りになりますので、第2回以降で今都知事がおっしゃったようなことも含めながらお話を進めていきたいと思えます。

それでは、これを持って閉会させていただきます。どうも、ありがとうございました。